広報ポスターデザイン候補作品

資料５

作品番号【　１　】
タイトル：「私から」

【コンセプト文】

まずはじめに、このポスターのコンセプトは「従来のスポーツポスターとの違いを出しつつ、一目で見てスポーツポスターとわかるデザイン」です。ビジュアルは、具体的な競技をしている人を載せるのではなく、バトンタッチのシーンを使う事であまりスポーツ感を出さず、スポーツが苦手、スポーツに興味が無い人でも抵抗無く受け入れられる様にしています。また、通りかかった人がパッと見ただけで違和感を感じ、思わずその場で足を止めてみてしまいそうなビジュアルになっています。

具体的には、バトンタッチのバトンがないことによって普通のバトンタッチとは違う違和感を人に与え、「なぜバトンがないのだろう？」と疑問を感じさせる工夫をしています。更に、背景を「白地」にすることでリレーのバトンタッチではなく、いろんな意味を持った「見る人が想像できる」デザインになっています。

最後に、タイトルの「私から」には「他人事ではなくあなたの事、自分の事としてみて欲しい」という思いを込めて、自分事である事を意識させるアイメッセージにしました。

【制作者】
イラストレーション領域
イラストレーションコース２年　内山岳大

広報ポスターデザイン候補作品

資料５

作品番号【　２　】

タイトル：「８ねんご しがで こくたいがあるよ」

【コンセプト文】

８年後開催される国体告知ポスターということで、まずは「国体頑張りましょう！！」といった『熱意』をコンセプトにするのではなく、国体に興味のない・運動が苦手だという人にも親しみやすいよう、「ゆるさ」を追及しました。

このポスターの前を通った人が「なんだこれは？」と目を留めてくれるよう、リアルな人間のフォルムではなく、図形的なイメージに仕上げています。また、漢字が多い文字列は、コロッとしたオモチャのようなフォントを使いカラフルに見せることで堅苦しさを和らげています。

【制作者】
メディアデザイン領域１年　吉田さやか

広報ポスターデザイン候補作品

資料５

作品番号【　３　】
タイトル：「これからの滋賀」

【コンセプト文】

近畿地方の重要な源流となっている琵琶湖から水を連想し、今回のテーマの一つは“水”としました。そのため遠近をつけた琵琶湖を背景に、水着を着た大きな人物は“水”泳スポーツをしています。琵琶湖の水面から飛び出した選手が散らす水しぶき、これを私は球技で使うボールにしてみました。

『まとまり』や『一丸となって』というような意味合いを込めて今回の二つ目のテーマは“球”としました。デザインは水の美しさやこれからの滋賀県に新たにスポーツのかっこよさを追求し、またＡ１という大きなサイズを利用して“球”に代えた水しぶきの細部までこだわり、鑑賞者を飽きさせないように、シンプルで誰でもわかるように工夫しました。

【制作者】
イラストレーション領域１年　澤谷亮

広報ポスターデザイン候補作品

資料５

作品番号【　４　】
タイトル：「始動」

【コンセプト文】

　滋賀県らしさ、直に目にとまるインパクト、伝えたい事が一目でわかる、これがこのポスターのコンセプトです。１年間と長い期間掲載されるので「これねー、もう覚えたわ」と、思うぐらいに頭に残るようなポスターでありたいと思います。滋賀県の伝統産業の一つである藍染めをイメージして制作しました。

　背景と文字を染上げた布地のようなテクスチャーにする事でイメージが湧いてくる様に考えています。全体を文字だけで構成し、インパクトを与えると同時に情報が直に入ってくる様にしました。これからつくりあげる国体という事で大きく「始動」という文字を入れて、８年後ではあるが国体はもう始まっているんだぞ！ということを伝えるポスターにしました。

【制作者】
メディアデザイン領域
グラフィックデザインコース２年　長谷川瑠夏

広報ポスターデザイン候補作品

資料５

作品番号【　５　】
タイトル：「今昔俊足」

【コンセプト文】

　滋賀県（近江）という土地の歴史の深さに着目し、かつて全国の交通の要所となった歴史を前面に出してみました。滋賀由来の近江商人を現代のアスリートと融合させ、背景には全国から集まった街道を使いました。街道の色は陸上競技場のトラックの赤褐色になってます。

　キャッチコピーにある「俊足」という言葉には足が速いという意味の他に、才能がある・優れているという意味もあり、大会のイメージと滋賀の歴史にぴったりだと考えました。

【制作者】
メディアデザイン領域
グラフィックデザインコース２年　福島綺子

広報ポスターデザイン候補作品

資料５

作品番号【　６　】
タイトル：「スタートラインに立て」

【コンセプト文】

　キャッチコピーは「国体開催の８年前の今、始動しようとしているプロジェクト。まずはスタートラインに立たなければならない」というメッセージと、「８年後（ゴール）に立っているのは一体誰なのか。もしかしたら今、そこに立つあなたかもしれない。その誰かもわからないシルエットを掴むにはまずスタートラインに立たなければいけない。」というメッセージを込めました。

　イラストは、まだスタートしていないが目の前のその先に確かにあるという状況を表しています。

【制作者】
メディアデザイン領域
グラフィックデザインコース２年　福島綺子